

イヴォンヌ・レイナーは、1969年の『コネチカット・コンポジット』の上演から、『コンティニューアス・プロジェクト—アルタード・デイリー』（1970）という新しい方向性を目指す作品を始めました。美術家ロバート・モリスの作品からタイトルを借りたこの『コンティニューアス・プロジェクト—アルタード・デイリー』は、即興や集団での意思決定、多くの要素の同時進行を多用し、ここでは『Chair/Pillow』も『観客の作品』として上演されていました。この作品から、レイナーを含めた、グランドユニオンという即興を行うダンス・グループが結成されました。（以下、プログラム抜粋）

ホイトニー美術館

1970年3月31日、4月1日、4月2日

## コンティニューアス・プロジェクト—アルタード・デイリー

イヴォンヌ・レイナー

### 出演

ベッキー・アーノルド、ダグラス・ダン、デヴィッド・ゴードン、バーバラ・ロイド、スティーヴ・パクストン、イヴォンヌ・レイナー他。

オブジェと「身体の付属物」 デボラ・ホリングワース

フィルム ジャック・アーノルド（『縮みゆく人間』）

マイケル・ファジャンズ（『コネチカット・リハーサル』）

フィル・ニブロック（『ライン』）

音響監督 ゴードン・マンマ

観客は、いつでも三つのパフォーマンスエリアのどこにでも行ってかまいません。ただし、メインのパフォーミングエリアを決して横切らないように、その周りや壁に沿って、一箇所からもう一箇所へと進んでください。

コンティニューアス・プロジェクト—アルタード・デイリーは、その名称をロバート・モリスの彫刻作品からとっています。この作品は1969年3月のプラット・インスティテュートで行った、様々な要素を集めた30分間の初めてのプレゼンテーション以来、だんだんと変化し、膨らんでいきました。新しい要素をパフォーマンス自体の中で見つけ出し、教えようと試みたのは、そのときが初めてだったのです。すぐに起こったことは、通常は上演に先行し、トレーニングし洗練させていく過程である稽古のなかでおこることを、継続的に検証しようとする努力と、このリハーサルと上演という二つの現象を明確に切り離す必要があるのかどうかについて、高まっていく不信でした。この変化に伴ってきた興味深いことは、グループの中での作業でのやりとりが実りあるものになってきたことと、私がしがみついていた色々なコントロールが次第に廃れてきたと自覚し始めたことでした。それは例えば、イベントの順序を決めることや、その全てをやる的確な手法についてです。もっとも重要なのは、私の決断がその個々のメンバーの反応によっていっそう影響を受けるようになった事実です。コンティニューアス・プロジェクトが、全体として、集団での意思決定の結果とは言えないものの、作品全体を通して、私自身のものではない、個人の反応や主張に由来する多くの細部、もしくはわたしたちが一緒に働くようになった仕方、つまり、自由に作品についての意見や連想を交換し発展させてきたことのおかげである多くの細部が列挙できないほど沢山存在するということを、指摘するのは重要です。

私はジョン・シモン・グッゲンハイム財団の援助に、心から感謝の念を示します。通常私は私の作品によっては生計を立てていないにもかかわらず、フェローシップという形式によって、昨年中はこの作業に集中することが可能になりました。